

第四章 列島地域でのイスラム国

第四章 列島地域でのイスラム国

第一節 列島での最古のイスラム国

〈129〉 中国とインド間の往復航路はマラッカの港が登場する前から知られていた。七世紀のスリウィジャヤ時代に、中国とインド間の航海はマラッカの港を経由していなかった。当時マラッカの港は存在していなかった。その名前も述べられてはいなかった。中国からインドへの航路はバタンハリの河口にある Melayu 港¹を経由していた。現在のジャンビ市付近である。この航路は中国僧の義浄著「南海寄帰内法伝」にこのように述べられている。「義浄は耽摩立底(Tamralipti あるいは Tamluk)から羯荼(荼)(KatahaあるいはKedah)に向けて出発した。ここで冬になるまで停泊した。王の船に乗って、彼はここ(Kedah)から南に現在はスリウィジャヤの一部になってしまった Melayu 港を目指した。この航海には一か月間を要した。普通、船舶は二月に Melayu に来航する。ここ(Melayu 国)で夏になるまで停泊する。その後、北にむけて広東へ出発する。約一か月後に目的地に到着する。」〈130〉

〈訳者註：上記の原文と解説は以下の通り〉

根本説一切有部百一羯磨卷第五の註に自ら叙して

(耽摩立底国) 従斯両月汎船東南到羯荼国 此属仏逝 到之当正二月 (中略) 停此到冬汎船南上一月許到末羅瑜洲 為仏逝多国矣 亦以正二月而達 停 至夏半汎船北行 可一月余便達広府 経停向当年半矣。

とある。この文は頗る省略的なれども、これを解釈すれば義浄の帰還行程を明瞭ならしむるを得る。即ち

- A 耽摩立底国より両月船を東南に汎べて羯荼国に至る。時は正に二月に当たる。故に耽摩立底国出発は垂拱元年十二月末である。此の間の航路には冬季に東南気候風ありて、之に抗するが故に二月を要するのである。然るに往路(註 18)にてはこの気候風に乗ずるも半月許とさすは甚だ短きに失す。なんとなれば風力の利用はさほど多くないからである。即ちこの航路は冬季にては往路は一月余、帰路は二月と見るが正当である。故に此の時は垂拱二年二月である。
- B 停止此至冬は二月よりその年の冬まで約十月間羯荼国に停ったのである。但し此の時羯荼国は既に室利仏逝の版図に属して居った。
- C 羯荼国より末羅瑜国に至るので南上は東南上である。馬刺加海峡には冬季に東北気

¹ (訳) 103 頁の地図参照

候風と海流とが起こる。義浄の帰路は之に抗する故に往路及び無行禪師伝の十五日に比して多く、一月を要したのである。

D 亦以二月而達は下に室利仏逝国を省略したのである。故に垂拱二年の冬季に羯荼国を発し約一月を費<157>やして末羅瑜国に到り、其処の経停と航程とを併せて翌年の正二月に室利仏逝国に到達したのである。

E 停。至夏半は其の年即ち垂拱三年夏半(五月仲夏)の如く見ゆるも、義浄が多年室利仏逝に滞留して証聖元年五月洛陽に帰還せるは有名なる事実である。故に停は垂拱四年より長寿二年まで満六年間、計え年の八年間を示すのである。而して夏半の上に延載元年の四字を加えてみるべきである。然る時は義浄は延載元年五月に信風に乗じて室利仏逝を発し、海上約一月、六月に広州に達したのである。

F 経停向当年半の向は「近」「殆」の義、当年半は当年の後半にて延載元年七月・八月・九月・十月・十一月・十二月の六月である。之より広府を発し証聖元年五月(仲夏)に洛陽に帰還したので、時は西紀 694 年五月に当たる。

G 以上義浄の帰還行程を表示すれば

ナランダ寺 垂拱元年秋頃無行禪師に送られて発す。

耽摩立底国 抄賊に逢う—垂拱元年十二月発。

羯荼国 海上約二月正月到—滞留八月—冬に至り出発す。

末羅瑜国 海上一月許—十一月頃到る—垂拱三年一月頃出発す。

室利仏逝国 海上約半月—垂拱三年正二月到る—計え年八年間滞留—延載元年五月出発す。

広府 海上約一月—延載元年六月頃到る—滞留六月—証聖元年一月頃出発す。<158>

洛陽 証聖元年五月到着—長安出発より洛陽に帰還するまで実に二十五年(計え年)である。

<出典：「大唐西域求法高僧伝」 足立喜六訳注 岩波書店刊行>

中国とインド間の往復航路は 15 世紀初頭にマラッカ港市が勃興するまで Melayu 港を経由していた。それ以来、中国とインドの間を往復する船舶はマラッカに停泊し Jambi には停泊しなくなった。換言すれば、インドから中国への航路はスマトラの東海岸沿いではなくマレー半島の西岸沿いを通るようになった。ということは 15 世紀以前にはスマトラ東海岸にいくつかの港湾都市があったことになる。港湾都市の勃興はスマトラの東海岸の諸国の勃興と深く関係している。7 世紀に述べられているのは、Sriwijaya と Melayu、Baros である。これらの諸国は仏教を奉じるヒンドゥー国に含まれる。

12 世紀末にはスマトラ東海岸に Perlak という名のイスラム国がみられる。この名は後日 Peureulak となり、12 世紀の初期からその地に居住し始めたエジプトやモロッコ、

ペルシャ、インド出身の外国商人たちによって建国された。建国者はアラブ人の Quraisy(クライッシュ族)であった。このアラブ商人は Perlak 王の子孫である現地の女性と結婚した。この結婚で彼は Sayid Abdul Aziz という名の息子を得た。Sayid Abdul Aziz は Perlak 国の初代サルタンになった。Perlak のサルタンに即位してからは Alaidin Syah と名乗った。このように彼は Perlak の Sultan Alaidin Syah という名で知られている。彼は 1161 年から 1186 年まで国を統治した。後日この Perlak サルタン国を建国することになる外国商人たちの来訪は 1028 年以來続いた。それ以前は、Perlak は王を意味する mohrat/meurah/marah が支配していた。Sayid Abdul Aziz はアラブの Sayid と Perlak の Marah 姫との間の子孫で混血アラブ人であった。Sayid Abdul Aziz が信じていたイスラムはシーア派のイスラムであった。Perlak サルタン国は一世紀以上続き、何人かのサルタンが知られている。二代目のサルタンは Alaidin Abdurrahim Syah Ibn Sayid Abdul Aziz で 1186 年から 1210 年までの統治期間であった。三代目のサルタンは Alaidin sayid Abbas Syah Ibn Sayid Abdurrahim Syah で、1210 年から 1236 年までの統治期間であった。〈131〉四代目のサルタンは Alaidin Mughayat Syah で 1236 年から 1239 年の統治期間であった。五代目のサルタンは Mahdum Alaidin Abdul Kadir Syah で 1239 年から 1243 年までの統治期間であった。六代目のサルタンは Mahdum Alaidin Muhammad Amin Syah bin Malik Abdul Kadir で 1243 年から 1267 年までの統治期間であった。七代目のサルタンは Mahdum Abdul Malik Syah byn Muhammad Amin Syah で 1267 年から 1275 年までの統治期間であった。八代目のサルタンは Alaidin Malik Ibrahim Syah で 1280 年から 1296 年までの統治期間であった。

Sayid Abdul Aziz と Marah(現地の王族)双方の子孫の間の政権争いは 1236 年から 1239 年までの Sultan Alaidin Mughayat Syah の治世に起きた。この政権争いに Sayid Abdul Aziz 側は負けた。このように 1239 年以降、Perlak の Marah の子孫である Sultan Mahdum Alaidin Abdul Kadir Syah に率いられることになった。サルタンになる前、Mahdum Alaidin Abdul Kadir Syah は Orang Kaya (Rangkaya) Abdul Kadir という名前であった。彼の統治期間はたった四年間だけであった。Perlak サルタン国の支配権はイスラム法学者の Malik Abdul Kadir に奪われてしまった。この人こそが Marah Silu の義理の親であったのだ。Perlak の支配権は Abdul Malik Syah という名の

息子に継承された。この Abdul Malik Syah の治世に Marah Perlak 王朝と Sayid Aziz 王朝の間で政権争いが生じた。その結果 Perlak サルタン国は Perlak baoh/南と Perlak Tunong/北に二分されてしまった。前者は Sultan Alaidin Abdul Malik の子孫の Sultan Alaidin Mahmud Syah に率いられ、後者は Sayid Aziz 王朝の Mahmud Alaidin Malik Ibrahim に率いられた。1280 年に sultan Alaidin Mahmud Syah はサルタンになり 1292 年に死去した。sultan Alaidin Mahmud Syah の死後、この二つのサルタン国は sultan Alaidin Malik Ibrahim によって再統一された。しかしながら、Perlak サルタン国は Sayid Aziz 王朝と Marah Perlak 王朝との間の主導権争いの影響で大幅な後退を余儀なくされた。13 世紀末に Perlak サルタン国はスマトラ東岸諸国の間で役割を担うことはなくなってしまった。この政権争いで Marah Perlak 王朝は大いに敗北したのであった。多数の Marah の子孫たちは他の土地に移住し、Sarah raja や Serbajadi、Lukop、Balang Keujren などの村落を作ったのであった。²

この Sayid Aziz 王朝と Marah 王朝の政権争いは外来王朝と現地王朝との主導権争いであった。実際に争われたのは sultan Perlak が支配していた胡椒の権益と Bandar Perlak を経由する輸出権益であった。アラブと中国人の旅行者によると、Nampoli, Perlak, Lamuri, Samudera 地域のアチェでの胡椒栽培は 9 世紀以来有名になっていたとのことである。このアチェの胡椒は Malagasi(マダガスカル)から持ち込まれたものと思われる。7~8 世紀にマダガスカルでの胡椒栽培は有名になっていた。マダガスカルの胡椒はアラブとペルシャの商人によってアジア大陸沿岸部と欧州大陸で商品になっていたのである。その多数がスマトラ東岸に来訪してきていたペルシャとアラブ商人は商品としての胡椒を持ち込みアチェ地域で胡椒の試験栽培を行った。Perlak はスマトラ東海岸の北半分の地域における胡椒の輸出港になった。胡椒の輸出は高額の利益をもたらし、Perlak 港に来訪しその後そこに定住したエジプトやペルシャ、グジャラート(インド)の外国商人たちは当初以来 Marah Perlak に支配されていた胡椒の権益をすべて支配しようとしたのであった。アラブ人の一人が Marah Perlak の女性と結婚した。この婚姻から Sayid Abdul Aziz が生まれたのであった。シーア派イスラムを信仰する外国商人たちの支援で、Sayid Abdul Aziz は Marah Perlak の支配権を奪取しその後 1161 年に Perlak サルタン国を建国した。Sayid は Alaidin

² Perlak サルタン国に関しては H.M. Zainuddin 著 Tarikh Aceh の p94-104 参照のこと。

Sya の別名で Perlak のサルタンに即位した。混血アラブ人に率いられた Perlak サルタン国はシーア派イスラムを信仰するアラブ、エジプト、ペルシャ、グジャラートの外国商人たちから十分な支持を得たのであった。〈133〉

スマトラ東岸北部で Perlak サルタン国以外には Pasai サルタン国というエジプトの Fathimiah (ファーティマ)王朝の海軍提督が率いるほかのサルタン国があった。Pasai サルタン国は Pasai 河口に位置しエジプトの属国であった。Pasai サルタン国はエジプトのファーティマ王朝の Nazimuddin Al-Kamil 海軍提督に率いられて 1128 年に建国された。エジプトのファーティマ王朝による Pasai サルタン国の建国の理由は、ファーティマ王朝がスマトラ東岸地域の香料貿易を支配しようとしたからであった。この香料貿易を支配するためにファーティマ王朝は艦隊を動かしてグジャラートの Kambayat 港市を攻略し Pasai の港を開放し Minangkabau の Kampar Kanan と Kampar Kiri 川の胡椒生産地域を奪った。Pasai 港市は胡椒の主要輸出港となり、一方グジャラートは Kampar Kanan と Kampar Kiri 川地域で産出された胡椒の交易市場となった。上記の三地域はファーティマ王朝に高額の利益をもたらし、この王朝は繁栄を極めた。Kampar Kanan と Kampar Kiri 地域を奪取するための遠征で、Nazomudin Al-Kamil 提督は亡くなった。彼の遺体は 1128 年に Kampar Kanan の河畔の Bangkinang に葬られた。

ファーティマ王朝は 976 年に Ubaid Ibn Abdullah によって建国された。1168 年にシャフィー派イスラムの Salahuddin の軍によって壊滅させられた。エジプトのファーティマ王朝の壊滅でエジプトとの関係は断絶したが、この Pasai サルタン国はそのまま独立を保った。1168 年にはこの Pasai サルタン国は Kafrawi Al-Kamil 提督に率いられていた。We 島出身でインドとペルシャの混血である Johan Jani 提督は 1204 年に Kafrawi Al-Kamil 提督の手中から Pasai の支配をもぎ取った³。〈134〉Pasai サルタン国はさらに永続して強力になり、大航海時代においてインドネシアでは最強の国家を形成したのであった。

いずれにせよ、シャフィー派イスラムのエジプトの新しい王朝はシーア派イスラムを奉じる Pasai サルタン国の存続を望んでいなかった。この新王朝は Mamaluk(マムルーク)王朝であった。このマムルーク朝は 1285 年から 1522 年までであった。実際には、

³ Tuanku Rao p503

マムルーク朝もファーティマ朝と同様に香料の交易を支配しようとしていた。1284年にマムルーク朝は、シーア派の影響を払拭するためと同時に Pasai 港の支配者から主権を奪うためにインド西海岸の元イスラム法学者の Fakir Muahmmad を伴って Syaikh Ismail をスマトラ東岸に派遣した。Samudera Pasai で彼らは Iskandar Malik の名で Pasai の軍に入った Marah Silu と出会った。Syaikh Ismail は Marah Silu をシャフィー一派に入信させようとおだてあげた。その時、Marah Silu はクルアンの読誦もうまくシーア派イスラムに入信していた。Seri Kaya と Bawa Kaya という名の Marah Silu の部下はシャフィー派と一緒に入り Sidi Ali Chiatudin と Sidi Ali Hasanuddin と改名した。エジプトのマムルーク朝の支援で Marah Silu は Syaikh Ismail 別名 Malikul Saleh によってサルタンに即位した。Samudera 国は、シーア派を奉じる Pasai と Perlak サルタン国の競争相手の国になった。Samudera/Pasai はマラッカ海峡に面したスマトラ東海岸の Pasai 河口に位置していた。

Marah Silu の出自についてははっきりしたことがいえない。Hikayat Raja-raja Pasai (パサイ諸王の伝記)では、Marah Silu の父親は Marah Gajah で母親は Betung の姫であったと語っている。Betung の姫は金髪であった。この金髪を Marah Gajah 引き抜いたところ白い血が出た。この白い血が止まった後、Betung の姫は失踪した。〈135〉この出来事は Muhammad 王という名の Betung 姫の養父の耳に届いた。怒った Muhammad 王は直ちに Marah Gajah を探すために部下たちを動かした。Betung 姫がいなくなったことを恐れた Marah Gajah は Ahmad 王という名の養父の家に避難した。Muhammad 王と Ahmad 王は兄弟同士であった。しかし上述の Betung 姫の失踪はこの兄弟間の衝突を引き起こした。両名とも戦死した。Marah Gajah もこの戦いの中で殺されたのだった。

Betung 姫に取り残された二人の息子は Marah Sum と Marah Silu という名であった。彼ら二人は家を出て放牧生活を始めた。Marah Sum は後日 Birun の王になり、Marah Silu は Peusangan 側の上流部を開墾した。毎夕 Marah Silu は網を仕掛けたが、毎朝仕掛け網を川から引き揚げると中身はミミズだけであった。怒ってそのミミズも茹でてしまった。Marah Silu が土鍋のふたを開けると不思議なことにその中には黄金が見えたのだった。茹でたミミズが本当に黄金に変わったのであった。このミミズを茹でたのはずっと Marah Silu だけであったので、Marah Silu はミミズ食いという話が広まった。

この噂は兄の Marah Sum の耳に届いた。Marah Silu は Peusangan の上流部から追い払われた。最終的に Marah Silu は Rimba Jirun 国を奪いそこの王になった。Marah Silu は Samudera 国を建国した。彼は巨大な蟻が一匹住んでいた丘の上に宮殿を建てた。この蟻はこの丘の近隣住民たちから Semut dara (娘の蟻)と呼ばれていた。これが Marah Silu の国を samudera と名付けたゆえんである。他の伝承は、サルタン Malikul Thahir の所有する Pasai の犬がこの丘の上で小鹿とけんかしていたので、Pasai の丘がこのように呼ばれていたと説明している。Pasai の犬はこの丘の上に葬られた。これが Pasai の丘の名前の由来である。〈136〉

上記の解説のわずかな部分からでも、Hikayat-Raja-Raja Pasai の作者は Samudera Pasai 王国に関係する地名や歴史上の人物の出自を解説しようとしたことがわかる。この行為は民間語源(kereta bahasa)に他ならないのである。このように Betung 姫と Marah Gajah 関連の伝承は、Hikayat-Raja-Raja Pasai の作者による Betung 人と Marah Gajah、Marah Silu の父母の名前の出自を説明するための努力の結果であった。Pasai の語源は tapasai = tepi laut (海の端)である。Tapa は tepi =端で、スマトラのバタック地方の名前の Tapanuli の語を形成した tapa n uli で知られている。Tapa の語はポリネシア語族に「端」という意味で多数みられる。Sai/tasi/tasik/tahi の語は海を意味し、インドネシアポリネシア語族にも存在する。Pasai の語は pantai(海岸)の同義語で、語源も同じである。Samudera は海という意味に他ならない。Pasai 国は海の端に位置していた。それ故、Samudera 国と同一なのである。この呼称は、Marah Silu によって開発されたことのある Peusangan 川上流地域の内陸国に相対する地域につかわれたものと思われる。

1285年にシーア派を奉じるイスラムPasai国は混乱に巻き込まれた。敵対関係にある Perlak の Muhammad Amin と Temiang の Yusuf Kayamudin の両者が Pasai のサルタンになろうとしていた。当時、Pasai のサルタンは Pasai 国の三代目サルタン Alwi al Kamil の孫であるサルタン Bahauddin Al-Kamil であった。サルタン Bahauddin はサルタン Johan Jani の孫であるサルタン Ibrahim Jani を退けたのだった。このような経緯から Pasai 国の主権争奪のための四つどもえの戦いが起きた。この四つどもえの戦いは、Syaikh Ismail に率いられたマムルーク朝とサルタン Pasai に反旗を翻した Marah Silu の二つのグループに尻馬に乗せられた。海からは Syaikh Ismail の指揮下のマムルー

ク朝の艦隊に、陸からは Marah Silu の指揮下の Batak/Gayo 軍に攻撃された。1285 年にシーア派のサルタン Pasai の支配は終焉した。〈137〉Marah Silu 別名 Malikul Saleh の指揮下でシャフィー派の新しいサルタン国が誕生したのだった。

蒙哥(Mongka)指揮下の元軍の攻撃の影響で1258年以来、バグダッドからエジプトに左遷されていた Syarif Makah の名を以て、Syaikh Ismail が Sultan Malikul Saleh を Samudera/Pasai のサルタンに任命した。Syaikh Ismail による Marah Silu の即位が、シャフィー派の Samudera/Pasai 国における初代サルタンを生み出した。それは第一にシーア派を奉じる Pasai 国での力の均衡に基づいてマムルーク朝がシャフィー派イスラムを奉じる強力な原住民を必要としたからであった。第二には Syaikh Ismail の理解によると、Marah Silu はスマトラ東海岸で好き勝手にやっているシーア派を殲滅することに賛成するであろうということであった。第三には、シーア派イスラムのペルシャ、アラブ、グジャラート商人たちの手中から胡椒の販売権を取り上げることに賛成するだろうとマムルーク朝が望んだからであった。Malikul Saleh が Samudera/Pasai を支配している間、シーア派の人の多くは利害損失を考えて寝返り、シャフィー派になったのであった。

側室から生まれたサルタン Aladdin Muhammad Amin bin Abdul Kadi の子孫である Perlak の姫 Gangga Sari と Malikul Saleh は結婚した。Samudera Pasai 国の勃興と共に Perlak のサルタンは後退を余儀なくされた。スマトラ東海岸北部において Samudera Pasai は最重要港となった。Gangga Sari 姫との結婚から、サルタン Malikul Saleh は Muhammad と Abdullah という名の二人の息子を得た。サルタン Malikul Saleh は 1297 年に死去し、長男の Muhammad に交代した。Muhammad は sultan Malikul Thahir という名を追加された。二人目の子は 1295 年にシーア派に寝返り、その後 Aru Baruman サルタン国を建国した。このように Malikul Saleh の統治時代には抑圧されていたシーア派は Abdullah 別名 Malikul Mansur の統治以来、Aru baruman で新風を得たのであった。Sultan Malikul Thahir は 1326 年まで統治し、その後 Sultan Ahmad Bahian Syah Malikul Thahir に交代した。〈138〉Malukul Saleh の統治時代に、Samudera Pasai は 1292 年に中国からペルシャに向かう途中のマルコポーロの訪問を受けた。Ahmad Bahian Syah Malikul Thahir の治世下には、中国へ向かう北アフリカ出身の Ibn Batutah (イブン・バトゥータ)が Samudera Pasai を訪れた。イブン・バトゥー

タの訪問は中国への往路が 1345 年で帰路は 1346 年のことであった。Sultan Ahmad Bahian Sayah Malikul Thahir は 1349 年に崩御した。交代者として Zainul Abidin Bahian Syah がサルタンの地位についた。Ahmad bahian Syah の治世の末期の 1339 年に Samudera Pasai は Gajah Mada が率いるマジャパヒト軍の攻撃を受けた。書きとどめておかねばならないもう一つの件は、Zainul Abidin Bahian Syah の娘が、1404 年にマラッカサルタン国を建国した Parameswara 王と結婚したことである。この結婚の影響で、Parameswara 王はシャフィー派イスラムを信仰するようになった。その後、マラッカはマレー半島の全東岸と西岸でのシャフィー派イスラムの中心地となった。

Samudera 王国の正式名称は Samudera Aca Pasai で、その意味は「Pasai に都がある素晴らしい Samudera 王国」である。Pasai の都は現在すでになくなっている。⁴その位置は現在の Blang Me 村付近である。この Samudera の名こそ現在われわれが Sumatra⁵と呼んでいる島の名前の源なのである。Sumatra とはポルトガル人による呼び名である。これ以前、その名は Perca であった。義浄の著書から知られるように、中国の旅行者は一般的に Chin-chou (金島)と呼んでいて、その意味は「黄金の島」である。Aceh になったのは「素晴らしい」という意味の Aceh という呼び名からである。ナガラクレタガマではこのスマトラの名称はまだ知られていなかった。〈139〉ナガラクレタガマではスマトラ島の各部分と呼んでいるだけで島の名前としては呼んではいなかったのである。

ナガラクレタガマの大 13 節 1-2 項で、アチェ地域のいくつかの部分はマジャパヒトの支配下で守られている国と呼ばれている。ナガラクレタガマで呼ばれているスマトラ島の各部分とは Jambi, Palembang, Toba, Darmaçraya, Kandis, Khawas, Minangkabau, Syak, Reken, Kampar, Panai, Kampe, Haru, Mandailin, Tumihang, Parlak, Lwas, Samudera, Lamuri, Batan, Lampung, Barus である。これらがマジャパヒトに屈服した Melayu 地域のすべてである。ナガラクレタガマによると Melayu の名はスマトラ島と同じである。

Samudera イスラム国へのマジャパヒト軍の攻撃に関する伝説は確かにアチェの民

⁴ (訳) 廃墟は Lhoksmawe 近郊に残存しており、近隣のマレー人のみが参詣に訪れるけど聞いている。2011 年頃

⁵ (訳) インドネシア語では Sumatera と綴る

衆の間に流布している。この攻撃は Samudera 国の発展の速さをマジャパヒト王国が懸念したのがその原因であった。

この Samudera イスラム国へのマジャパヒト軍の攻撃については H.M. Zianudding 著 Tarikh Aceh の第 17 章 Ekspansi Majapahit 「マジャパヒトの拡大」という題の論文で読むことができる。ここで引用するのは重要と思われる数件だけとする。Perlak 国境付近でのマジャパヒト軍の攻撃は、その地域で Samudera 軍が防御を固めていたため失敗に終わった。しかし Gajah Mada は攻撃を中止しなかった。彼は海に戻り、防御されていない東海岸の無人地帯を探した。Gajah Mada は Gajah 川で軍を上陸させた。ここで丘の上に砦を構築した。現在でもこの丘は Bukit Meutan (Gajah Mada の丘)と呼ばれている。それから Gajah Mada は陸と海からの二面作戦を実行した。海からの攻撃は Lhoksumawe と Dikuala Jambu Air 海岸に対して敢行された。陸からの攻撃は Perlak と Pedawa の中間に位置する Paya Gajah を経由して敢行された。陸からの攻撃は失敗に終わった。Samudera 軍は Perlak 川の西岸に陣幕を張りその砦は Paja gajah Alue Bu であった。〈140〉川の東岸が戦場になった。川で逃げようとするマジャパヒトの船舶は焼かれた。マジャパヒト軍はやむを得ず海へと退却したがマジャパヒトに戻ろうとはしなかった。Gajah Mada は Tamiang⁶国を攻略するつもりであった。マジャパヒト軍は Langsa 地域に上陸し砦を建てた。この場所は今でも Banyak Pahit⁷と呼ばれている。Gajah Mada は商人を装った斥候を Benua (Tamiang)の都に送った。その後、Mega Gema 姫を嫁によこすことと一緒に Samudera を撃つという要求を持たせて Tamian の支配者である Muda Sedia 王に対して公式な使者をたてた。この二つの申し出は拒否された。その結果 Gajah Mada は Tamiang を攻撃して Benua の都を殲滅する決定を下した。軍は宮殿に達した。Muda Sedia 王の財宝は略奪にあい、宰相の娘と Mega Gema 姫は捕えられ下流に連れて行かれた。

この下流への連行中、Gajah Mada と Mega Gema 姫の乗った船が水漏れを起こし修理せざるを得なくなった。修理中、Gajah Mada と部下たちは幕屋に滞在し、Tuanku Ampon Tuan が売っている果物を買った。Gajah Mada と部下たちがこの果物を賞味している間 Tuanku Ampon Tuan は Tamiang 軍の攻撃の合図として大太鼓を

⁶ (訳) Aceh の Langsa 付近にあった国

⁷ (訳) Majapahit の変形

打ち鳴らした。この時に Tuanku Ampon Tuan が姫を奪い返して逃走した。この Taminang 河畔の Gajah Mada の幕屋の場所は Bukit Selamat と呼ばれている。このようにして、マジヤパヒト軍による Mega Gema 姫の略取は失敗したのであった。

これが、ナガラクレタガマにも少し述べられている Samudera と Tamiang 国に対するマジヤパヒト軍の攻略に関する伝承である。マジヤパヒト軍の Samudera と Tamiang 国に対する攻略は、サカ歴 1258 年、西暦 1336 年以来の Gajah Mada 宰相の政策となった「列島の理想」の実行の一環であった。〈141〉

第二節 マラッカ港市

マラッカに 1512 年から 1515 年まで滞在したポルトガルの商人 Tomé Pires はマラッカの港町について、マラッカはポルトガル人の手に落ちる約 100 年前に開かれたと言っている。中国からペルシャへの 1292 年のマルコポーロの航路はスマトラ東海岸沿いであり、マレー半島西海岸沿いではなかった。マルコポーロがマラッカ海峡を通った時、Pasai 港市はまだマラッカ海峡の船舶交通を支配していた。マルコポーロのマラッカ海峡通過は Marah Silu または Sultan Malikul Saleh の時代から離れている。その当時、Samudera Pasai サルタン国はちょうど輝きの時を迎えていた。Ibn Batuta は 1345 年の中国への航海でこの時もマレー半島の西海岸沿いではなく、スマトラの東海岸沿いの航路を通った。Ibn Batuta は中国への往復とも Aru Baruman 港に停泊した。Ibn Batuta はマレー半島の西海岸にマラッカ港市があるなどと言も書いていない。13 世紀や 14 世紀にはこのマラッカの港市はまだ知られていなかったかあるいは存在していなかったのである。

マラッカ港市を建設したのは、Parameswara に殺された兄弟のかたきを討つために艦隊を率いて Tumasik(シンガポール)にやってこようとする Pahang 王の復讐戦があることを怖がって Tumasik から逃げ出してきた Parameswara であった。Parameswara 王は Muar に逃げ込み、その後マレー半島の西海岸の小さな村であり海賊と漁民の巣であったマラッカに身を潜めた。このマラッカ集落で Parameswara は短期間に最高権力者になった。〈142〉

1403年に中国全土は明王朝の永楽帝によって支配された。永楽帝の支配開始以来、彼は現状の安定化を始め、国民の安全と中国と外国との間の関係を回復しようとした。国民の安全と宮廷の必要性から永楽帝、別名成祖は外国との通商関係と外交関係を修復しようとした。その目的のためには東南アジアと西アジアに使節を送る必要があった。外国との通商と外交関係の回復計画立案は鄭和、別名馬三保に任された。計画立案以外に鄭和はその海外への使節の実行も任されたのであった。諸外国との通商と外交関係を修復するために鄭和自身で中国の使節団を率いなければならなかった。最初の使節派遣は1403年中国からジャワとカリカットに向けて行われた。この最初の使節派遣は尹慶(Ying Qing)提督に率いられたものであった。突然マラッカに停泊した使節団がやってきた機会を Parameswara は利用しようとした。マラッカの最高権力者として彼は尹慶と会って、マラッカ海岸の支配者として中国皇帝に柵封してもらおうように依頼した。外国との関係を探ることが仕事であった尹慶はすべて了承した。この皇帝の認証は Parameswara にとって大きな意味を持っていた。この認証のおかげで、マラッカがシャムの軍に攻撃された時に中国皇帝の庇護と援助を得られたからであった。この認証を得るため Parameswara は尹慶提督に 40 tahlil (1,512g)の黄金でできた花を献納した。中国の宮廷はぜいたく品と高価な女性の装身具不足に悩んでいた、この黄金の花はこの提供は尹慶の希望にかなうものであった。〈143〉

1405年に Parameswara 王は永楽帝からの柵封認証のために北京へ使節を急いで派遣した。Parameswara 王が率いるマラッカ国に対して永楽帝が公式に柵封の認証を与えたという証拠として使節は帽子と絹の服、黄色の pajong を与えられた。しかしながらこの認証はマラッカを攻撃するシャムに対する防波堤にはならなかった。シャム軍のマラッカ攻撃は1409年にもあった。この年に、鄭和(別名三保大人)は馬歡という名の通訳である華人ムスリムを伴って東南アジアを歴訪した。この東南アジア訪問で、鄭和提督は、中国がマラッカの本当の親密国であることをシャムに示すためにマラッカ港に停泊した。マラッカの平和を脅かすものは誰でも中国の艦隊の攻撃を受けると。鄭和は宮廷の屋根を葺くための瓦を寄贈した。その二年後、Parameswara が540人を連れて北京を答礼訪問した。この訪問はマラッカと中国を実に緊密化させたのであった。これ以来シャム軍はマラッカの足を踏む(脅かす)ことをしなくなった。

中国との親交のおかげで Parameswara 王の地位は日増しに強くなった。Parameswara 王は国民の生活向上に寄与するために 1405 年から 1409 年にかけてマラッカ港を整備した。1409 年にマラッカ港は既に大きな港になった。マラッカ港は大変戦略的で良い位置にある。南シナ海からの船は右に曲がって直ちに安全で平和な港に停泊できる。Parameswara 王はマラッカに船でやってきた各々の商人たちに安全を保証した。15 世紀の航海の多くは海風に頼っていた。風待ちの間、商人たちは中国やインド、そしてインドネシアからの商品、特に東インドネシア産の香料、を買う十分な時間があった。〈144〉極端に狭いシンガポール海峡を船が越えた後、船は港に停泊することができたのだった。

Parameswara 王がシャフィー派イスラムを信仰するようになって、Pasai 出身の Megat Iskandar Syah という名の女性の勧めのおかげで、イスラムと一緒に入信するマラッカの国民が多かった。マラッカはマレーで最初のイスラム国のサルタン国になった。当初スマトラ東岸沿いを航行し Pasai 港や Aru、Jambi を訪れていたアラブ、ペルシャ、インドのイスラム商人たちは、1414 年を境にマレー半島西岸沿いを航行しマラッカ港市に停泊するようになった、数年間の間にマラッカ港は北からは中国、西からはインド、ペルシャ、アラブ、東からはインドネシアと三方向から商船が集まってきてにぎやかになった。マラッカはマラッカ海峡での交易と航路を支配するようになった。ジャワや中国、インドからの商船がそこに入港しなくなったのでスマトラ東岸沿いの諸都市は寂れ始めた。交易ルートと航路が新しく開発されたからであった。

第三節 15 世紀と 16 世紀の交易ルート⁸

イスラムの発信地はアラブの国で、正確には Jedah 港と Makah/Madinah である。アラブの国は西アジアに位置している。東南アジアに至るために当時の航路は沿岸に沿って東に向かうものであった。商人たちは直接 Jedah から中国へは行かず、彼らはリレー方式で商売をしていた。商船の航海はリレー式であった。当初アラブとペルシャの商人から成り立っていた西アジアの商人たちはインドの西岸に位置するグジャラートの Kambayat (Cambay)まで航海した。アラブとペルシャの商人たちはアラブの布、

⁸ (訳) 地図は 149 ページ参照

真鍮製品、香水、武器、頬紅を Kambayat に持ち込んだ。Kambayat からは種々の香料と丁子、ニクズク、錫鉱石、中国陶器、絹布、白檀、お茶という中国と東南アジアの産品を買ったのであった。Kambayat で購入された商品はその後アラブとヨーロッパで交易された。このようにヨーロッパ大陸の人たちはペルシャとアラブの商人を経由して東南アジアの産品を賞味していたのであった。

インド東海岸の商業の中心はベンガルと Koromandel⁹であった。これらの港市はグジャラートの Kambayat ほどの重要性と大きさを有していたのではないが、これらの港市は、極めて広大なインド南部と東部地域の経済の動脈であった。これらの港市を通じてその住民は必要とする諸外国に産品を売っていたのであった。Koromandel はサルン用のチェック柄木綿布、ベンガルは絹布とアヘン、各種薬剤を輸出していた。マラッカ商人たちから彼らは東アジアと東南アジアの産品を買付けた。ビルマとシャム(タイ)はコメの産地として知られていた。Pegu とタイの西海岸はマラッカへの食糧を輸出していた。マラッカは東南アジアで最重要港となり、グジャラートや Koromandel, Pegu からの商人たちと、インドネシアからの商人もふくめて南海と中国沿岸の商人たちとが出会う場所であった。その当時インドネシアの海上交易はマジャパヒト王国のジャワ人にまだ支配されていた。彼らが東インドネシアから香料や丁子、ニクズクをマラッカに運んでいたのであった。樟脳や胡椒、象牙、白檀などのスマトラ産品は、半分マジャパヒトに従属したスマトラの商人によってマラッカに運ばれた。東南アジアと西アジア、東アジアの交易ルートの中でマラッカ港市は極めて重要な役割を担っていたのである。米や胡椒、錫鉱石、黄金のような西インドネシアの産品を運んだインドネシアからの商船は、マラッカの港市で売るために荷卸しするだけで十分であった。〈146〉これらの船は南シナ海の海岸沿いに北上したり、グジャラートを目指して航海する必要がなかった。マラッカでインドネシアの商人たちは、マラッカの北側あるいは西側に位置する諸外国の産品を買うことができた。インドから絹布、Koromandel からはチェックの木綿布、ペルシャからは香水、アラブの布、中国絹布、中国から金糸刺繍の布と彼らが必要としている装飾品を購入できたのであった。中国からの商船も積み荷を売るためとインドネシアやマラッカの西に位置する諸国の産品の彼らが必要とする産品を買うためのマラッカまで航海した。この件は商人にとつ

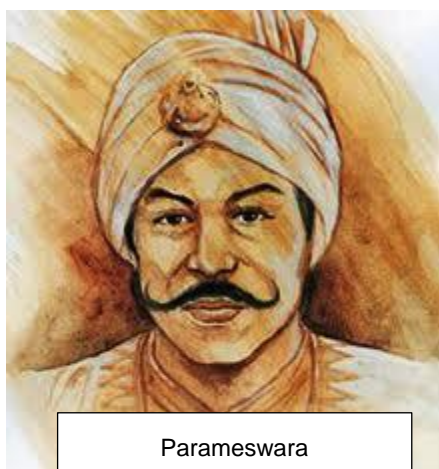
⁹ (訳) Chennai

て大変大きな意味を持つ労力と時間の節約であった。

14世紀と15世紀に新しく獲得したこの新ルートはマラッカ海峡を通過する商業ルートを大変利したのだった。西に向かうすべての中国からの船とインドネシアからの船はマラッカ海峡を通過しなくてはならなかった。このようにマラッカはマラッカ海峡の港の一つとして存在した。このようにマラッカは、その北と東西に位置する諸国との交易を支配しえたのであった。このことから、マラッカ港市は大変にぎやかな商業都市になり、三方向からの商人たちが出会う中心地になったのである。

第四節 マラッカからのイスラム布教

イスラムの布教は、インド西海岸の Kambayat / Gujarat へ Jedah から海岸沿いにペルシャ湾を経由して、リレー式に航海をしていたアラブ商人によって行われたことは既に述べた。〈147〉このことから、アラブ商人と直接関係したペルシャ沿岸とインド西沿岸の商人だけがすでにイスラム教徒になっていたことがわかる。Gujarat はアラブ、ペルシャ、インドとマラッカの商人たちが出会う場所になった。ペルシャとインド商人たちはマラッカの商人よりずっと前にイスラムの影響を受けていた。Gujarat は既にイスラム化したアラブ、ペルシャ商人たちとインド商人、それにまずはマラッカからの東南アジアの商人たちが出会う町となった。三方向からの商人の出会いの場であり商業都市であるマラッカが布教を始める根拠地になったのである。



Parameswara

1414年にPasaiから嫁を貰ったMuar王Parameswaraは妃に進められてイスラムに入信しMegat Iskandar Syahを称号した。この出来事は特にマラッカの人たちの間で、かつ総体的にマレー半島の奥地に住んでいる人たちへのイスラム布教に強い後押しとなった。南海沿岸と中国からの商人、さらにはインドネシアからの商人もマラッカでイスラムが花開きすくすくと育っていくのを自分たちの目で見たのであった。彼らのイスラムとの出会いは極めて激しいものであった。マラッカ港市は東南アジアでイスラム商業都市になったのであった。

しかしながら、マラッカ港市は中継貿易を行っていたことを覚えておく必要がある。中継業者のうち大多数は一般的に商品の生産地へは行かない。彼らはマラッカ港市に駐在しているだけで、マラッカで商品と交易するためにやってくる外国商人からの商品を待っているだけで良かった。ゆえに、彼らは中国製の物や現地産品を買うために自分で中国に行く必要がなかった。さらにマルク諸島の香料を買うために東インドネシアへ自分で行く必要もなかったのである。〈148〉これらの商品はマラッカに運ばれてきた。このようなやりかたをとったマラッカ港市の商人たちは南海沿岸や中国、はたまたインドネシアから来た外国商人たちとは商売敵にはならなかった。さらに、これらの商人たちは利益の追求のためにその生産国で交易される産品を徹底的に支配しようとしていた。彼ら(マラッカの商人)は他国の商人を競争相手としてみようとはしなかった。彼らが必要としているすべての商品がマラッカで買うことができ、各々の国に運ばれた。このように、彼らは自国の産品を携えてマラッカに来航し、それぞれの国の人たちが必要としている商品を積んで出港していた。これこそが”dagan timpuh”この意味は「どこにも行く必要がない」ということで、彼らは商品を買ってそれを必要としている人に売ることができ、彼らが得た儲けは大きなものであった。数は少なかったが南海沿岸諸国とインドネシアに航海したマラッカの商人もいた。

外国商人が多数訪れ賑わっている商業都市として、マラッカ港市は外国商人に代理店をマラッカに開く機会を与えた。それ自体で代理店を開こうとする外国商人はマラッカに滞在するために特定の人々を送りこむことになった。利益を得るための商売以外に、彼らはマラッカのムスリムたちの生活を知るようにもなった。その目的を持っている人たちはイスラムの勉強をする機会を与えられその後イスラムに入信するようになった。マラッカの王と有力者たちは、マラッカの治安は彼らが行っている商業活動に大きく依存しているために、外国商人たちがマラッカに居住することを好んだ。外国商人の代理店の開設は商業活動を活発化させた。代理店のスタッフたちの多くが実力者の子供のみならず一般庶民クラスの商人の子供までのマラッカのイスラム女性と結婚した。〈149〉妻の勧めで彼らの中でヒンドゥー教からイスラムに改宗する人が稀ではなかった。その影響で彼らの中にはマラッカ港市にそのまま居住する人が多かった。マラッカのイスラム女性との結婚は時に不純な動機を含んでいた。その土

地のイスラム女性との結婚の影響はその女性が商人の子孫か同地の有力者の子孫であった時には外国の代理店の人たちは利益をもたらす便宜を得たのであった。

Parameswara はマラッカ港を建設したゆえにマラッカの平和に大きく貢献したマラッカ王であり、Pasai 人の妻と結婚したおかげでシャフィー派イスラムに入信したマラッカの最初のサルタンであった。1424 年にサルタン Megat Iskandar Syah が崩御し、Muhammad Syah という名の息子に交代した。イスラム教徒のマラッカのサルタンが sri maharaja を称号したのはこれが初めてであった。サルタン Muhammad Syah は sri maharaja という呼び名でも知られている。この称号の使用は、Muhammad Syah がスリウイジャヤの Sailendra 王家の子孫であり Balaputradewa の子孫であることにその元を置いている。Pajang 王は 14 世紀末に Tumasik に逃げ込み、その後 Tumasik 王を暗殺して自分が Tumasik 王になった。知つてのとおり 1397 年にジャワ軍による最後の Palembang 攻撃が行われマジャパヒトの支配下に落ちた。Palembang からの Sailendra 王家のマラッカ統治はたった三世代のみで、1446 年に終焉した。

Rokan 妃から生まれた Sri Maharaja Muhammad Syah の息子は、Tun Ali 指揮下のタミルイスラム教徒グループの挑戦に耐えることができなかった。Sri Parameswara Dewa Syah は二年間統治しただけであった。同サルタンはタミルイスラムグループにマラッカのサルタンとして推挙された Kassim 王に暗殺された。Kassim 王が Sri Parameswara Dewa Syah の政府を転覆させたあと、Muzaffar Syah という名で彼はマラッカのサルタンになった。この Muzaffar Syah の治世間に Tun Perak という名の強者がマラッカに登場した。Muar でのシャム軍との対戦で、Tun Perak の率いるマラッカ軍がその敵を撃退した。それ以来 Tun Perak は政府内で昇進した。彼は政策を司る首相に昇進した。Tun Perak は野望を持ち支配し続けることを望んでいた。三世代の間、いうことを聞く若いサルタンを推薦する戦略を用いてマラッカを支配したのであった。実際に、たしかに Tun Perak はマラッカサルタン国の栄光を作り出した首相であった。1459 年から 1477 年の Sultan Mansyur Syah の時代に Tun Perak は Pahang 攻撃を計画した。Pahang はマラッカの北側に位置して東岸に面しており、シャムの攻撃の盾になっていた。経済的な観点から見ると Pahang は錫と金の産出で繁栄を極めている地域であった。この豊富な錫と金が、計画中の遠征のための軍資金を賄ううえでマラッカサルタン国にとって極めて重要であった。Pahang を支配することによりマラッカは

北に自由に移動することができるようになった。マラッカのマレー半島東岸への遠征は Pahang を通じて行うことが可能になったのである。

Tun Perak は戦略立案の専門家として、マレーの統一より商業ルートとしてのマラッカ海峡の支配に傾注した。それ故、マラッカ海峡沿岸の港市の征服に全神経を集中させたのだった。これらの港市はマラッカの競争相手であったからである。これらの港市がすべて降伏したのなら、マラッカ港市は交易ルートでマラッカ海峡を十分に支配することができたからであった。〈151〉このように Tun Perak は、Muar, Bengkalis, Karimun 諸島、Bintan 島、Johor を征服するために直ちに軍隊を動かしたのであった。マラッカの軍隊にすぐに征服されたスマトラ東海岸の港市は Aru/Baruman, Rokan, Siak, Kampar, Indragiri であった。南端の Palembang と北端の Pasai を除くスマトラ東海岸のすべての港市がマラッカの支配下に入った。

Tun Perak に全面的に采配を振るわれその即位を Tun Perak によって決定されたサルタン Alauddin Ri'ayat Syah の治世下(1447-1468)にマラッカは歴史上の人物 Hang Tuah を知らしめた。後日提督を称号することになる Hang Tuah 将軍は Tun Perak に育てられ教育を受けた。歴史上での強者は国家が最も輝いている時代と同時期に登場するものである。実際にこの人こそその時代に輝きを与えた人なのであった。彼が仕えていた国家は大きくなった。このようにこの時代の状況は当該時代に生きていた人物によって確定されるとともに聡明さ、根性と行動を起こす勇氣、その人物が有する機会と権力によって決まるものである。社会的状況は決定要因にならないとはいえ、その国の国民たちに影響を与えることができる。劣悪な社会状況を改善する、あるいはその逆向きになる精神的状況が支配的要素になるとはいえ、社会的状況と国民たちの精神的状況でその反対の影響もある。

マレーの統一は Tun Perak の後継者の Tun Putih と Tun Mutahir によってなされた。Tun Perak が 1498 年に亡くなった後、Tun Putih は首相として Manjong (Manyong?), Beruas, Kelantan をマラッカの支配下に服従させた。〈152〉Tun Putih の死後、Matahir 首相は Patani と Kedah を征服した。サルタン Alauddin Ri'ayat Syah の治世でマレーはマラッカ政府の下に統一され、マラッカ海峡は完全にマラッカ港市の支配下に入ったのだった。スマトラ東海岸の諸国はマラッカに服従した。マラッカ海峡を通過する商船はすべてマラッカ経由となったためにこれらの港市は寂れてし

まった。これがマラッカの輝かしい時代であった。その輝きが最盛期に達したのはサルタン Alauddin Ri'ayat Syah の治世であった。サルタン Mahmud Syah の治世(1488-1528)下では衰退の時代が続いた。その衰退は、後で解説するように、1511年のポルトガル軍の攻撃によって起きた。

歴代のサルタンの一覧表をここに提示する。

Parameswara (Megat Iskandar Syah)	1402-1424
Sri Maharaja (Muhammad Syah)	1424-1444
Sri Parameswara Dewa Syah	1444-1446
Muzaffar Syah (Raja Kassim)	1446-1459
Mansur Syah	1459-1477
Alauddin Ri'ayat Syah	1477-1488
Mahmud Syah	1488-1528

マラッカの拡大政策は、マレー半島西岸、スマトラ東岸、マレー半島内陸部を含む東岸と Lingga Riau 諸島へのイスラム・シャフィー派の拡散を伴った。マラッカに服従したスマトラ東岸の諸王はイスラム教徒であるマラッカのサルタンの娘を褒美として得た。この褒美の授与は宗教の拡散政策をも含んでいた。このイスラム女性との結婚の影響でスマトラ東岸の諸王はイスラムに入信した。同じことがマレー半島の東西海岸の被征服国で行われた。〈153〉戦争で捕虜になった王子たちはマラッカのサルタンの恩赦を受けるためにともにイスラムに入信した。このようにマラッカの拡大政策は宗教の拡大政策と並行して行われたのであった。

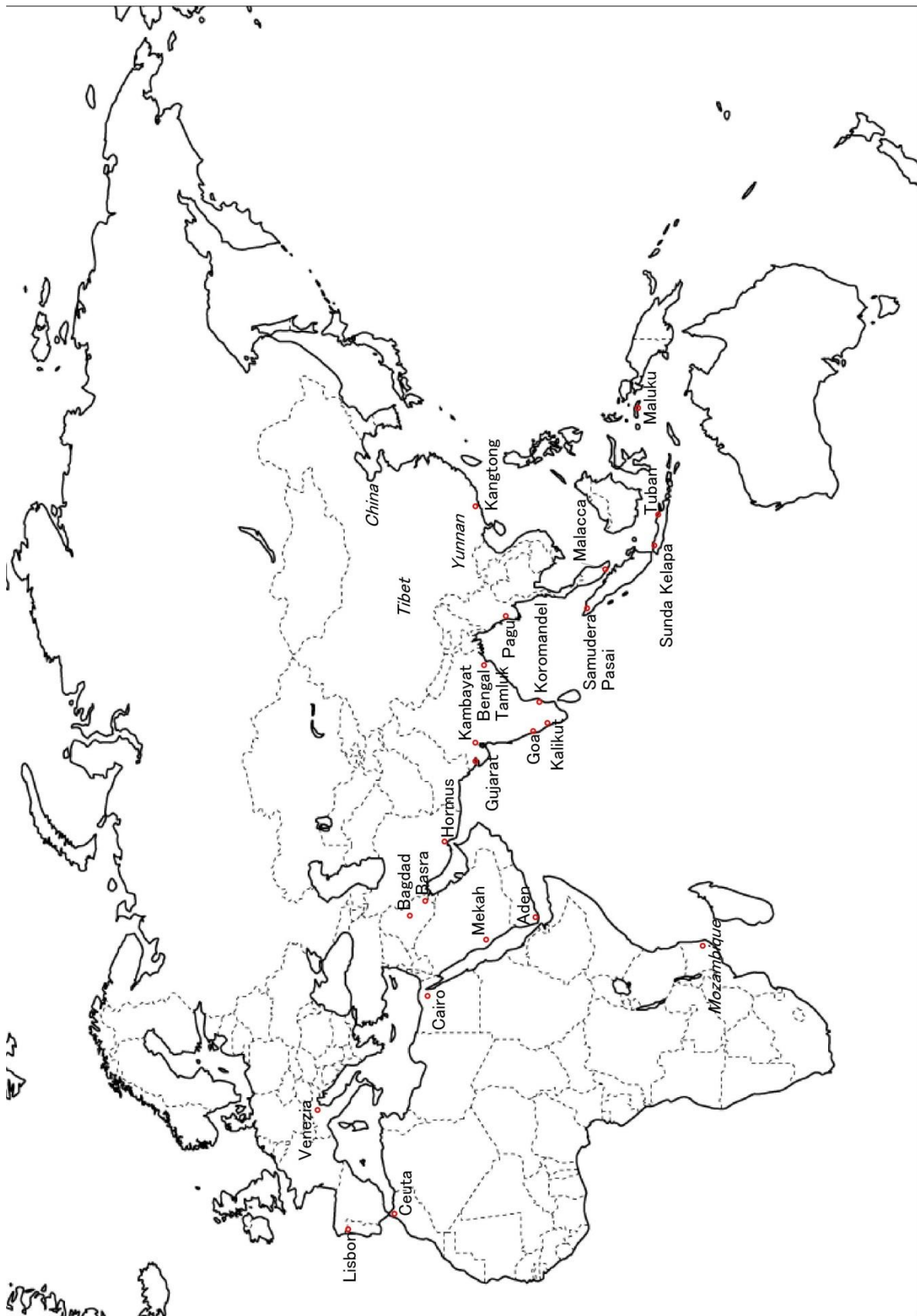
マラッカ海峡を支配する港市としてマラッカ港市は中国とインドネシア、インドの三方向からの航路が交差する中心地であった。中国とインドネシア、インド商人たちは互いにマラッカ港市で出会った。彼らはマラッカでシャフィー派イスラムが発展しているのを目撃した。Parameswara 王のイスラムへの入信の例がマラッカの国民や商人たちの多くをイスラムに導いたのであった。一緒にイスラムに入信した外国商人の代理店の人たちは、マラッカの有力者やサルタン自身からの商売上の便宜を期待してい

たのであった。支配者の行動は、それが間違えているか正しいかの判断を伴わずに大衆にまねされるのが普通である。大衆は支配者と同じようにしたがるものである。このようにしてこのサルタン Megat Iskandar Syah のイスラム入信は一般的にはマレーの人たち、特にマラッカの人たちのイスラム化を促進したのであった。15世紀にマラッカは政治的拡大と経済的拡大それに宗教的拡大を成功裏に進めたのであった。

マラッカ海峡はインドから中国へとインドネシアへの交通路である。商人たちによるイスラムの拡散はマラッカ海峡とマラッカ港市を經由したに違いない。マラッカにイスラムを持ち込んだインドのイスラム商人たちの大部分はシーア派イスラムを奉じるペルシャと Kambayat 出身の商人であった。マラッカで開花したイスラムはシャフィー派であった。このようにマラッカ海峡がイスラムの出口となった。こう言うのはやや無鉄砲とは思われるが、ジャワと東インドネシアの諸島、南シナ海沿岸諸国のイスラム化はマラッカ港市を經由したのである。たとえば、上記の地域のイスラム化はマラッカ港市から行われたものであるから上記の諸国のイスラム教はシャフィー/シーア派でなくてはならないはずである。マラッカではシーア派の市場が既に消滅してしまったと言える。このように、ジャワと東インドネシア諸島のイスラム化が本当にマラッカ港市を經由して行われたのは正しいのかどうかを詳細に検討する必要がある。シーア派で Daya / Pasai と Aru Baruman サルタン国をイスラム化するのに重要な役割を担った Gujarat と Kambayat の商人たちはジャワと東インドネシアでの市場開拓をしなかったのであった。

訳出終了 2013/5

修正 2015/9/5, 2015/10/05



大航海時代の港湾都市

